

三、学園運営の寛と厳

また「学校ばあちゃん」に叱られたの！

黒川 浩

私が武田ミキ先生にお会いしたのは、今から八年前のことです。きっかけは、本校の出身である家内と結婚したことでした。当時、大阪の高校に勤めていた私は、ある人の勧めでお会いすることになり、家内と一緒に、横川駅から可部線の電車にはじめて乗って可部駅に着き、根之谷川の土手を歩いて、あの文学部棟の二階にあった学長室に伺ったのが最初でした。それ以後夏休みなど、由宇町の両親のもとに帰省するたびに、何度かお会いすることに

なりました。

あと数年で四十歳というとき、長男で一人っ子である私は、何とか両親の近くに帰れないものかと考えて、このことを先生にご相談しました。そこで、先生がいろいろと心当たりの学校をあたっていただきましたが、なかなかありませんでした。そうこうしているとき、先生から本校で図書館の仕事をしながら、社会科学教諭で頑張ってみますかというお話がありました。それが、今から五年前のことです。かくして私は、先生のお世話で入居した、本校から十分あまりの東山県営住宅から出勤することになりました。

男子校から女子校へと転勤で、はじめ戸惑うこともありましたが、特に、図書の仕事は今までに経験したことがありませんでしたのでたいへんでした。しかし先生のご好意で、大学で「司書」の資格を取得することができました。このようにして本校での勤務がスタートしましたが、もともと鈍な私は、よく先生にお叱りを受けました。毎年必ず三回ぐらい高校の方にお電話がかかり、あの学長室で二時間ぐらい、「黒川さん、もっと骨惜しみせず仕事しなさい。まだまだ駄目ですよ。」と厳しく叱られました。ご存知のように先生自身が、夜の十時ごろまであの学長室で仕事をされているのですから、私はただただ下を向いているほかありませんでした。時には学千先生に救われるありさまでした。そしてそんな日、帰宅して私が悄気していると、下の息子に「また、学校ばあちゃんにしかられたの！（お会いしてから息子は、よく先生のことをこう呼びびしています）」とよく言われました。先生が体調を崩されたこの一年あまり、お叱りを受けることはありませんでした。思えば、あれは先生の私に対する叱咤激励だったのでしょう。病院から帰られてあの新しい家で静養されている間、家内がときどき、柏餅やおはぎを作ってお届けするだけで、私は一度もお会いしませんでした。お会いしておればきっと、また「黒川さん、……」とお叱りを

三、学園運営の寛と厳

受けたと思います。だから今、電灯の消えた学長室を見上げるとき、無性に寂しくなりません。本当に僭越ですが、先生は私にとっても「学校ばあちゃん」だったように思います。

最後に、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。